

「特別記事2」 学生セッション座談会①

日本語学会では、2021年度秋季大会から「学生セッション（研究準備発表）」を設けました。以前から本学会では大学院生による発表が多く行われていますが、将来の学界を担う学生を育てるといふ観点に立ったとき、発表の経験を積んで研究を進展させる機会や、他研究者等とのつながりを作る機会が、より多くの学生にとって必要であると考え、この「学生セッション」を新設するに至りました。

本記事では、実際に第一回の学生セッションで発表した学生による座談会の様子をお届けします。三回に分けてお送りする第一回の内容は、「研究内容とその発表」です。

◇ オンライン (Zoom)

◇ 2021年12月12日 (日) 午後1時～3時

「学生セッション・発表タイトル」

◇ 参加者：黄 冬思さん 「副詞「よもや」の変遷 ―意味及び共起する文末形式の観点を中心に―」

王 慧雋さん 「『日本語日常会話コーパス』における使役表現の使用実態

―テレビドラマのシナリオと比較して―」

戸田隼介さん 「発表挨拶等で用いられる「みなさん」の音声分析」

奥山 光さん 「漢語「透視」の展開」

司 会：津田智史・田中草大（ジュニア研究者育成制度検討委員）

参加者自己紹介

司会 みなさんこんにちは。私は本日司会を務めます日本語学会ジュニア

ア研究者育成制度検討委員会の津田と申します。どうぞよろしくお願いたします。

まず少しお時間をいただいて、本日の座談会について簡単に説明いたします。私たちの委員会は、若手会員の活動を活性化するために立てられた検討グループです。研究を進める若い学生の方や、これから研究を行いたいと考える方の支援策、発表成果公表の場の検討などを行っています。座談会はその一環の企画です。

今回みなさんにご参加いただいた学生セッション、座談会ともに日本語学会としても初めての試みです。ぜひみなさんには、大会に参加して感じたことなどを率直にお聞かせいただければと思っています。そして、みなさんが、どういうふうに関心を持っていらっしゃるか、今回の発表にどう取り組んでもらったか、普段どういうふうに関心されているか、こういうことを、今日お集まりいただいた四名の方でどんどんお話してもらって、情報交換をしていただく、こちらでも学会としてその内容を紹介させてもらうことで、他の同世代の人たちの起爆剤じゃないですけど、盛り上がりが出ていく感じを作れたらなというふうに関心しております。どうぞ協力よろしくお願いします。

それでは座談会に入っていきます。まずは、みなさんに自己紹介をしていただきます。

黄 黄冬思と申します。出身は中国の山東省です。今は新潟大学大学院の現代社会文化研究科に所属しており、指導教員は磯貝淳一先生です。日本語史の研究を今進めています。どうぞよろしくお願いします。



黄冬思さん

王 みなさま、こんにちは。王慧雋と申します。中国の上海出身です。一橋大学言語社会研究科博士課程に在籍して三年目です。「せる」「させる」が含まれている使役表現について研究しております。一橋大では石黒圭先生のゼミに所属しております。今日はいろいろみなさんとお話できた

うれしいです。よろしく願いました。

戸田 こんにちは。専修大学大学院文学研究科で日本語日本文学を専攻しております修士課程二年目の戸田隼介と申します。出身は東京都の江東区で、十年間相撲をやっております。いろいろ縁があつて日本語研究するようになりました。大学では王伸子教授の下で日本語音声を研究しております。本日はよろしく願いました。

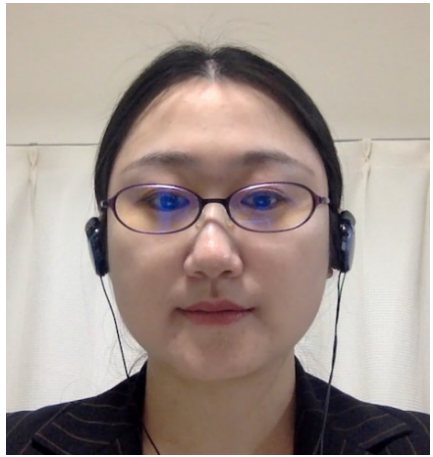
奥山 奥山光と申します。東京大学の人文社会系研究科国語研究室の修士課程一年です。出身は神奈川県厚木市です。指導教員は井島正博先生で、研究内容としては近代の漢語を中心に扱っております。どうぞよろしく願いました。

司会 よろしく願いました。以上の四名で本日の座談会を進めていきます。恐らくみなさん初めてお会いになるかと思うんですけども、肩肘を張らずにぎくばらんにお話できればと思っております。

研究内容と興味・関心のきっかけ

司会 では、早速内容に入りたいんですが、今回たまたまなんですけども、みなさん同じ時間帯に発表されていたので、それぞれお互いの発表を聞く機会がなかったと思います。簡単にご自身の発表タイトルと、そのテーマに興味、関心を持ったきっかけについてお聞きます。

黄 発表したテーマは「副詞「よもや」の変遷」です。「よもや」は「まさか」の類義語で、打消（打消推量）表現と共起して、想定外もしくは事態を否定する意味を表す副詞です。テーマを「よもや」にした理由は二つあります。一つ目は日本語学会の雑誌『日本語の研究』の展望号を読んで、従来の先行研究は副詞の変容に力を入れている感じがしました。「きつと」



王慧雋さん

とか「まさか」、「おおかた」、「多分」、そのような、つまり最初は名詞でそこからだんだん副詞になるいきさつは、先行研究では既に明らかになっています。その変化は主に、近世期に起こったものです。近世ではそのような副詞の容量が多かったのに対して、古代と現代で変容がなかった副詞はどのようなものがあるのか調べてみると、「よもや」は古代から近代で全くと研究したいと思いましたが、それが（研究を始めた理由の）一つです。副詞の変容の変遷がないのに、「よもや」はどのような役割を果たしているのかを明らかにしたいと思いました。

もう一つは、副詞用法に注目して話し言葉と書き言葉を考察した先行研究が多くないことです。特に近代の文学作品なら文語体と口語体のようなたくさんの観点から検討されているのに対し、近世期の文学作品を扱って話し言葉と書き言葉を検討する事例は多いとはいえません。「よもや」は最初話し言葉として存在していましたが、現在では書き言葉として認識されています。そこを糸口として近世期の話し言葉と書き言葉が、どのように認識されるのか明らかにしたいと思っています。

司会 ありがとうございます。留学生の方だと現代語を扱うことが多いかなと思うんですけど、日本語史の面でアプローチしようと思った、そこでかつ副詞を扱おうと思ったきっかけはあるんですか。

黄 それは個人の趣味に関わると思っています。最初日本に留学しに来たときは、現代語文法がちよっと苦手でした。あと日本の文化とか日本の歴史にすごく興味を持っていましたので、確かに先生がおっしゃるように、日本語史の研究は外国人としてはすごく難しいのですが、興味があります。

司会 ありがとうございます。ちなみにそのテーマをやっていて、何か難しかった点とか、今回の発表に限らずでもいいんですけど、研究を進めていく上で困った点とか、こういうところがすごく大変だったといったところもありましたか。

黄 やっぱ江戸時代の言葉は、今の言葉とかなり違いますので、読むには時間がかかりますし、文脈から意味を理解するのにも時間がかかります。訳書を見ないと分からないので、ちよっと難しいと思います。

司会 大変ですよ。日本人もやはり最初はそうだったところに苦労して同じようなところで悩んだりするのかなということを感じました。

次に、王さんお伺いしてもよろしいですか。

王 私は今回『日本語日常会話コーパス』における使役表現の使用実態―テレビドラマのシナリオと比較して―というテーマで発表いたしました。私は使役について研究しているんですけども、今振り返ってみればもう一四年、ずっと使役表現というテーマでやっております。今、黄さんのお話を伺って黄さんと違うなと思ったのは、私の研究の出発点は自分の学習経験だったことです。大学で日本語を専攻していた時に、当時文法が好きで、違う形式を使い分けて細かいニュアンスを伝えられることがすごく楽しいなと思っていました。その中の一つが「せる」「させる」が含まれている使役表現でありまして、その中の一つが「せる」「させる」が含まれている使役表現でした。例えば意味としては、誰かが自分でやらないで他の人に強制するか、あるいは何かをすることを許可するとか、そういった意味の理解はそ

んなに難しくはなかったんですけども、どうやって会話の中で使えばいいのか、先生を相手にして使っているのかどうか、そういうところがあまり分からなくて、授業では教えてもらえなかったので、大学院に進学してそれを研究テーマとしてやろうと決めました。

最初は、テレビドラマのシナリオを使って分析していました。日本語を勉強していたときも、テレビドラマとか映画を見るのが好きで、前後の文脈がはっきりしているので文法の使い方もわかりやすく、自分なりに分析しながら少しずつ自分も使えるようになったと実感したことが多いからです。ただ、研究を進めていくうちにやはりシナリオは、現実的な言語使用とちよつと違う部分もあるのでないかと思ひ始めました。今はたくさんさんのコーパスが公開されているので、現実の使用としてはどうなのかというところにも、興味を持つようになって、せっかく日常会話コーパス、素晴らしいコーパスが既に構築されているので、そちらも使って分析しました。

やってみて、コーパスには現れにくい使い方があるんだなということに気付いたのが、一番のやりがいを感じたところです。例えば「あなたが私にさせる」か、それとも「私があなたにさせる」のか、サセ手とシ手（使役する人物とされる人物）という観点から見てもシナリオとちよつと違うところがあつて。そういう分析の観点をに入れて、シナリオとコーパスの特徴を明らかにしようとした発表です。いろんな先生から貴重なコメントをいただけて、今回発表させていただいて良かったなと思ひました。

コーパスの用例を分析する上でやはり難しいと思つたのは、強制の「させる」なのか、それとも許可の「させる」なのか、一文だけでは分からない箇所が結構あつたことです。その度に会話の最初から映像や音声を確認して文脈から用法を分析する作業は地道で、時間もかかつたんです。でも

それは、日常会話コーパスを使う醍醐味でもあるので、母語話者の方の力も借りて何とか終わることができました。

司会 ありがとうございます。脚本とかで言うと、短い時間に内容を伝えるために、ある程度状況がそろつていたり、分かりやすく直前にそういった状況につながるものがあつたりするんですけど、日常会話はお互いの関係性とかも含めて、いろいろな前提条件、共有状況、共有情報などがあつた上での会話になるので、いろいろと判断は難しくなるかなと思ひます。資料の性質というところで、疑似的な会話である脚本と、実際の日常会話の違いというのが見えてくると面白そうだなとお聞きしました。王先生、ありがとうございます。

では、続いて戸田さん、お願いできますか。

戸田 タイトルは「発表挨拶等で用いられる「みなさん」の音声分析」
Prat（無料でダウンロード、使用できる音声分析ソフト）を使ってCSJ（日本語話し言葉コーパス）の音声进行分析したものです。最近は学会やこの座談会もそうですけど、コロナ禍ということもありオンラインで、



戸田隼介さん

いろいろな時間にさまざまな場所で気軽に学会や授業に参加できるようになつて、私も今修士二年目で、いろいろな学会や授業等にオンラインで参加させていただいています。

その中で冒頭のあいさつ等で「みなさん」という言葉を使う人がよくいらつしやると思

うんですけど、結構いろいろな講演を聞いていて、「みなさん」を「みなさん」と言っていない人がいるなというところに気付きました。「み」が「む」に聞こえたりとか、「なさん」というふうには、「み」を言わないで言ったりする方が、結構多くて。最初個人的な音声のゆれなのかなと思っただんですけど、結構いろんな方がおっしゃっていたので、日本語話し言葉コーパスは大きなデータベースで、音声分析をするのには一番いいのかなと思いい、分析をしたというのが研究の背景です。

この研究をなぜここまで突き詰めようと思ったのかというところは、「み」が「む」に聞こえるというのは、いわゆる非弁別要素の一つで、日本語教育を行う上で、あまり重要視されていない。「みなさん」が「むなさん」に聞こえるというのは、音声変異という研究の一つなんです。音声変異にも大きく二つあると思っていて、一つは、書き言葉にも普及している音声変異。例えば「何々してしまった」を「何々しちやった」というふうな口語表現、これは書き言葉、話し言葉両方で用いられるものです。『みんなの日本語』という、多く国内で用いられている日本語教科書でも、中級の第四課ですかね。「縮約形」というところで、そういう省略形を教える部分があります。

一方「むなさん」は、多分書き言葉で「むなさん」と書く人はいないと思います。研究は少ないけれども、やはり日本語学習者には、日本人以上の音声への気付きがあるということ、土岐哲先生もおっしゃっていたりして。やはりその中でもこの研究は必要なのかな、面白いなというふうに行っております。

司会 ありがとうございます。戸田さんにしてみれば、私が言ってる「みなさん」もしかしたら研究対象になるかと思うと、ちよつと怖いところですよ。一応ここでははつきりと「みなさん」と言っておきます（笑）



奥山光さん

戸田 すいません（笑）
司会 じゃあ最後に奥山さんにお願ひできますか。

奥山 はい。発表タイトルは、「漢語「透視」の展開」でした。今回の発表では「透視」という語を中心に扱ったわけですけど、そもそもどうして近代漢語というものに興味を持ったか、そしてどこに面白さを感じているかということからお話しします。

今思い返しますと、学部三年生のときに受けた陳力衛先生（成城大学）の授業でして、当時はそこまで深く考えることなく、面白そうだなということで受講したんです。その中でまず一つは近代漢語の研究が、日中およびその他の国問わず、今非常に熱い分野であるということ、その中に多数の解決していかなければならない問題点があるんだということを知ったわけですね。授業の中でちよつと試しに、一つある漢語についてこれこれの文献等を参照して調べてみましょうと、そういう課題が出たわけです。そこでいろいろと日中の先行研究、辞書類、あるいはそのような漢語が見られると期待されるような資料を、簡単に見ていったわけなんですけども、そうしていく中で既に行われている研究で取られているアプローチ以外にも、これはかなりいろいろ見方ができる分野なのではないかということ、何となく思っただけです。

それで自分でもいろいろと他の漢語についても調べてみようと思っていくうちに、ある特定の学問分野でいわゆる専門用語として誕生した漢語

が、その専門分野の文脈ではなくて、極めて一般的な用法を持ったり、あるいは小説や新聞記事等で用いられる、あるいは国語辞典に載るといようなかたちで、専門的な文脈を離れた用例が生み出されることがある。この間に何か言えることがあるのではないかとこのところから、実は卒業論文で「透視」と「投影」を扱っていたんですね。詳しくは省略しますが、学問分野ごと、例えば植物学の用語に着目して、植物学関連の文献を徹底的に調査をして、その動向を見るといような研究は既にたくさんあるわけなんですけども、それをちよつと離れてみて、横断的に見ると面白いことが分かってくるのではないかとこのところなんです。

実際に今回扱った「透視」という言葉も、専門的な文脈、それから一般的な文脈、双方に見られるんですが、専門的な文脈でも幾つかの専門分野で、専門用語として用いられているというところがあるわけです。その間の関係ですとか、時代的な前後関係も含めて考えていくことで、なかなか面白い着眼点になりそうだと思います。いろいろな分野の資料を見なければならぬというところは大変でもあるんですけども。特に明治初期の翻訳資料ですと、原書を当てる必要があるということもありますし、やはり中国からの影響が非常に大きいですから、中国で宣教師が西洋の資料を中国語訳していて、その中国語訳されたものが日本に入ってきて、訓点がつけられたりして、出版されてというような流れがあ

ったりするわけで、かなりいろいろな分野のものを読む必要があると。

今回扱った「透視」は図学という分野の専門用語として扱ったんですが、「透視図法」とか「投影図法」というものですね。今日で言うところと理科系の内容に当たるわけですけども、そういうところも知識としてしっかりと調べておく必要がある、かなりいろいろなものを見て、いろいろなことを知っておかなければならないというところは、大変なところとして挙げられると思います。その分非常にたくさんさんの情報が集まってくる。それをどのように分析してみるか、どういう立場からどのようなところに注目して見るか、非常にバリエーションがあるというところが、また面白いところの一つなのかなと思います。

司会 ありがとうございます。お聞きしていると恐らく「透視」とか「投影」も含めて運命的な出会いをして、これから長く付き合っていく漢語になるでしょうから、これから見ていく範囲は広がっていくと思いますけど、ぜひ頑張っていただければ。

これでおおよそそれぞれがどういったところに興味を持って、発表していただいたかというところはつかんでいただけたかなと思います。それではここからは、学生セッション自体についてお話しを伺います。

(次回に続く)

今回は「学生セッションを終えて」というテーマで、四名の参加者に学生セッションで発表を行なった感想や気付きについて話していただきます。次回の更新をお待ちください。